

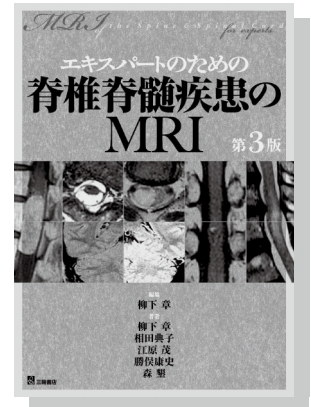
エキスパートのための 脊椎脊髄疾患のMRI【第3版】

編集：柳下 章

著：柳下 章，相田典子，江原 茂，他

福武敏夫

亀田メディカルセンター神経内科



◆この本は大著である。

以前の版からしてそうであるが、まずもって、A4版の大型の本である。したがって、持ち運びにくい。が、しかし、その分、画像の本にふさわしく、図が大きく見やすくわかりやすい。持ち運びはあきらめて、自分の机でじっくりと眺め、読むのがよい。その際、そばに電子カルテの端末があると、自分の症例の画像と引き比べることができ、なおよい。

次にページ数が多く、いっそう重くなった。「序」によれば、第2版の1.5倍のよしである（初版の実に2.4倍と計算される）。これは、脊髄とその周辺の疾患の画像診断の蓄積が飛躍的に増している証である。したがって、持ち運びはいっそうあきらめることになるが、その分、知識を得やすいといえる。厚さに乾杯の気持ちになるが、調べ物のときに深酒は禁物である。

大きくて厚いが、目次や索引、各所に配置された「BOX」なるミニコラムが整っていて調べやすいのが大きな特徴である。比較するのは失礼だが、Rossらによる本（Diagnostic Imaging: Spine,

AMIRSYS, 2005）は、ページ数ではなく特有の番号づけがあって、目的のページに到達しにくく、ストレスフルなのである。

そして、大著の割に（この表現は少し変だが）、項目ごとに、まず臨床的特徴が要約され（これはおそらく神経系の専門家よりも画像診断の専門家に役立つであろうが、いずれの初学者にとってもなによりのものであろう）、次に画像所見が、およその頻度や疾患によっては臨床経過での変化を含めて記載されており、さらに「診断のキー」があって、最後に鑑別診断が詳述されている。

◆この本の著者は大人（たいじん）である。

この大著は一人で書かれたものではないが、編著者の柳下 章先生の寄与が大半を占め、またその精神に貫かれている。その柳下先生は大人なのである。東京のど真ん中で開催されてきた Spinal Cord Club なる研究会があり、当初は年に3回、最近では2回の開催となったが、2015年12月の会で58回にもなる。この会には、脊椎外科医、整形外科医、脳神経外科医、神経内科医、神経病理専門医、

神経生理専門医などが参加し、学際的で活発な討論が行われているが、この画像診断時代に神経放射線科医の存在が大きいことはいうまでもない。その中でも柳下先生の存在は大きく、その画像診断・読影にずっしりした重みがある。それを落ち着いてさりと語られるところが大人の所以である。ときに先生の不在のことがあるが、参加者には欲求不満が溜まること甚だしい。

◆この大人がものさした大著の「序」に曰く：

「新しい画像所見の発見は、心と頭の準備ができていない人のみに訪れる」と。これをもって、臨床神経-画像対応の至言となす。したがって、本著は、初心者には初心者なりのガイドとなり、経験者には経験に甘んじてはいけないという警鐘となる。脊髄治療の金字塔がここに立てられたが、大人の精神はこれを乗り越えよと叫んでいる。もって、座右の書とすべし。

●定価（本体20,000円＋税）
A4判，920頁，三輪書店